

21世紀教育センターニュース

平成17年(2005年)4月 第6号

「協力しあい、支えあう能力」を育む21世紀教育を求めて……………	1
21世紀教育センター副センター長 武田 共治	
平成16年度前期21世紀教育学生アンケート結果の概要……………	2
21世紀教育学生アンケート歴代自由記述の主な意見への回答……………	5
講義紹介 比良木 高幸……………	8
北海道大学教育ワークショップから学んだこと……………	11
21世紀教育センター高等教育研究開発室 土持 法一	



「協力しあい、支えあう能力」を育む 21世紀教育を求めて

21世紀教育センター副センター長 武田 共治

21世紀教育は、「21世紀を生きるうえでの基本的な力を養うこと」を目標にしている。

それでは、21世紀の日本社会とはどんな社会であり、そこを生きるうえでの基本的な力とはどんな力なのだろうか。21世紀といっても、まずは私たちにとっては現在や近未来のことが問題となる。では現在はどんな時代なのか。日本社会が、バブル経済崩壊後、余裕のない冷たい社会に転換したことは誰でも知っている。生き残りをかけた「競争・リストラ型社会」となったのである。新入学生も、自分が大学に入学するために父母がどんなに大変であったのか、よく知っていることと思う。

内閣府の「現在の世相」調査（2002年）によれば、多くの日本人が「無責任の風潮が強い」(47.5%)、「自分本位である」(40.6%)、「ゆとりがない」(35.8%)、「活気がない」(30.5%)、「いらいらすることが多い」(28.4%)、「連帯感が乏しい」(26.0%)と感じている。また、厚生労働省『人口動態統計』によれば、年次別自殺者数が1998年から3万人をこえ、現在、3万数千人に達している。その他、いじめや、ドメスティック・バイオレンス(親しい男女間の暴力行為)なども増加している。このように現代日本社会は、「競争の社会」、「すさんだ社会」、「ストレスのたまる社会」になっているようである。

こうした競争型・ストレス型の社会を生きるうえでの基本的な力に対する理解は、多様であろう。それは競争に打ち勝つ力(相手を打ち負かす力)だと考えることもできるが、私はむしろ「協力しあい、支えあう能力」(自己を制御する能力でもある)であると考えている。適者生存の適者とは、必ずしも個体として強い生命体ではなく、むしろ共存能力の高い生命体であるという説もある。ストレス社会を生き抜くには、身近なところで、ストレスを上手に回しあって自然消滅させてゆく「ストレスは天下の回り物」型の人間関係=仲間関係を形成することが一番よい。経済回復のため

に人間の心を犠牲にしては、取り返しがつかないことになる。

21世紀教育は、「幅広い教養」や「専門知識・技能」の習得を通して「課題発見能力」と「問題解決能力」を養うように科目を配置している。その力が他者の排撃にのみ用いられては無意味であろう。その力に社会的意味を持たせ、その力を社会的に発揮してゆくためにも、「支えあう能力」が大切である。その能力を基礎に若者が力を合わせて、経済回復のみならず「競争・ストレス型社会」そのものを創りかえるだろう。

21世紀教育は、2006年から「新学習指導要領」(ゆとり教育)の高校生を迎え入れる。また受験生総数と入学定員総数の均衡による定員割れ大学の続出の恐れも指摘されている。大学間の大競争時代の到来である。そこで、21世紀教育には、「初年次教育」の視点が一層求められてくるだろう。高大連携を強化して高校生の実情に対応する視点、受験競争で疲れ果てた新入生の心のケアを重視する視点、新タイプの学生の好む新メニュー開発の視点、客を常連客にする(中退防止)視点も求められるであろう。私はこうした時代変化への対応が短絡的な小手先の対応とならないためにも、21世紀教育のすべての取り組みの基礎に、「協力しあい、支えあう能力」を養う視点を置いて考えていきたい。



平成16年度前期 21世紀教育学生アンケート調査結果の概要

平成14年度4月から開始された21世紀教育の改善を目指して、初年度、昨年度に引き続き21世紀教育センターが独自に企画・立案した「学生アンケート」が実施されました。

このアンケートは、21世紀教育がシステムとして機能しているかを検証し、センター全体として21世紀教育を改善していくことを目指して実施されたものです。アンケートは前期成績表と一緒に学生に配布し、後期履修科目届と共に提出するという仕方で行われました。学生が自分の成績を見た上で、成績評価の適切性などを判断できるようにするために必要な措置です。

21世紀教育実施3年目の今期は、1年生では過去2年間と同様、入学時のガイダンスやシラバスに対する印象と基礎教育科目の反復履修及び履修人数の制限に関する意識、基礎教育科目、英語コミュニケーション実習、多言語コミュニケーション、情報処理演習、スポーツ・体育実技、芸術実技、基礎ゼミナールに関する意識を調査し、その実態を把握することに焦点を当てて行われました。また2年生では「情報処理演習」に関する意識と実態調査に焦点を当て、さらに1年生と同様に基礎教育科目の反復履修と履修人数の制限に関する意識調査を行いました。

以下にその概要を示します。

平成16年度前期1・2年生に対するアンケート結果の概略

問1)～7)の<所属並びに開講時のこと>については1年生に対するものです。アンケートの回答数がほぼ同数であった昨年度(平成15年度)の結果を比較して示しました。H16は今期、H15は昨年度前期の調査結果です。

1年生の問8)～9)は2年生の問18)～19)と同じ項目です。1年生と2年生についてそれぞれ今期(H16)と昨年度(H15)を比較して示しました。

<所属並びに開講時のこと> 1年生に対するアンケート結果

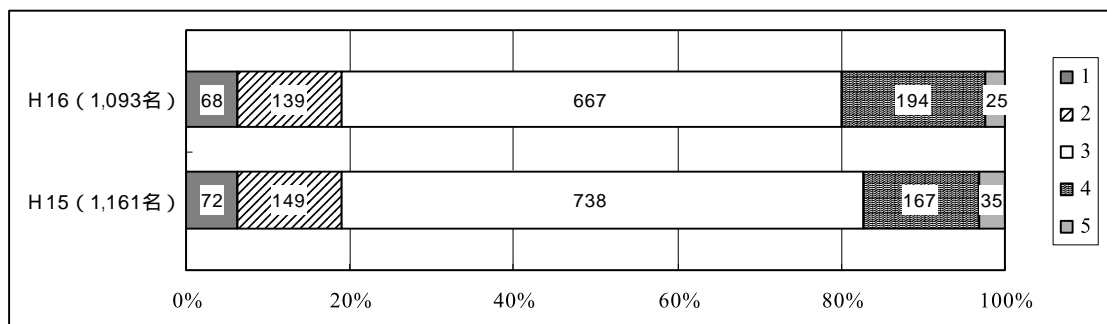
問1) あなたの所属学部・学科・課程などは次のどれですか。

学部	人文学部	教育学部	医学部	理工学部	農学生命科学部	回答数
配布数	357	245	282	305	186	1375
回答数	301	217	209	219	147	1093
回答率	84.3%	88.6%	74.1%	71.8%	79.0%	79.5%

配布枚数は1375、回答数1093名、回答率の平均は79.5%です。平成14年度前期の回答率が38.7%、平成15年度前期の回答率が84.4%でしたので、昨年に比べ約5ポイント減少しました。学部別では、回答率が最も高かった教育学部(昨年度も同じ)と最低の理工学部では16.8%の違いがありました。

問2) ガイダンスや「履修マニュアル」を通じて、「21世紀教育」の重要性や意義を理解できましたか。

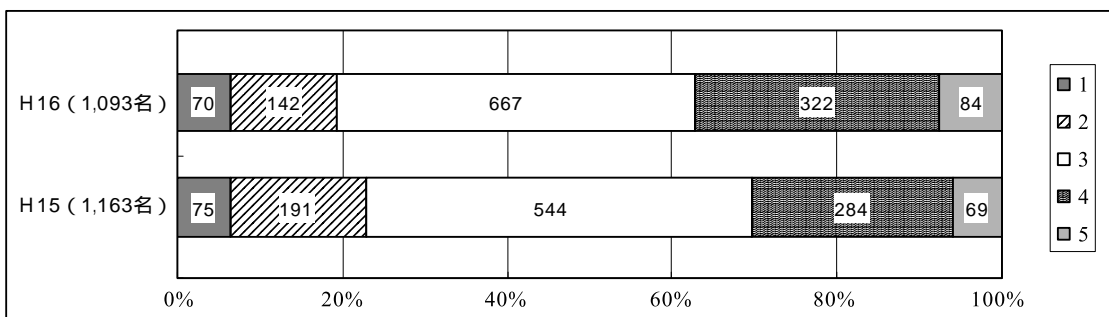
1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。 3. ある程度理解できた。
4. あまり理解できなかった。 5. ほとんど理解できなかった。



十分理解できた、かなり理解できた、ある程度理解できたを合わせると79.9%(H15は82.6%)が理解できたようです。しかし、61.0%が「ある程度」としていることは、学生のみなさんが積極的に重要性や意義を理解・評価しているとは考えにくいようです。全体的な理解度は昨年とほとんど変わりませんでした。

問3) 入学時のガイダンスの説明で、21世紀教育の履修のしかたがよく理解できましたか。

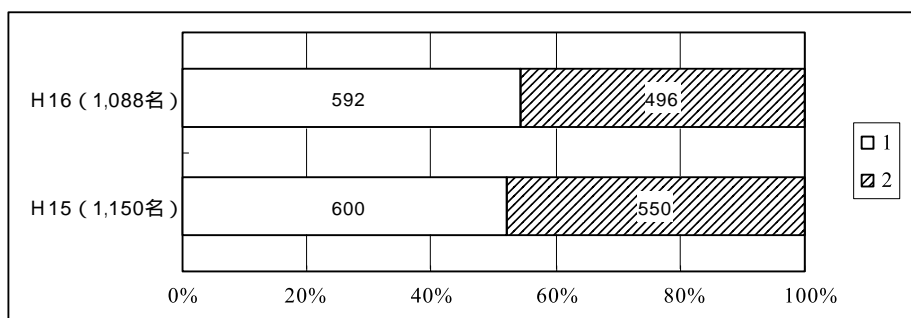
1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。 3. ある程度理解できた。
4. あまり理解できなかった。 5. ほとんど理解できなかった。



十分理解できた、かなり理解できた、ある程度理解できたを合わせると62.8%（H15は69.6%）が理解できたようです。昨年に比べて「かなり」と「ある程度」が合わせて6.8%減少しました。

問4)「履修相談」に行きましたか。

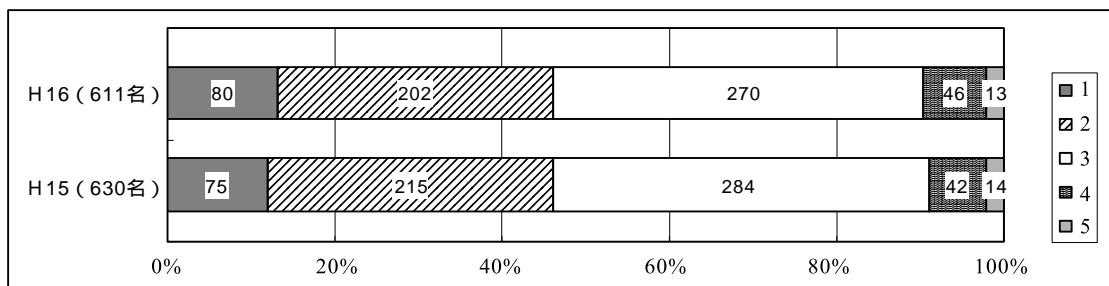
1. 相談に行った。 2. 相談に行かなかった。



相談に行った人は54.4%（H15は50.2%）でした。問3)の「理解できた」の割合と逆の傾向が見られたことから、ある程度理解できた人も含めて、理解できなかった学生のみさんの多くは履修相談を利用したようです。昨年に比べて「理解できた」が減少した分、履修相談を利用した人は増加しました。

問5)問4)で1.とした人におたずねします。履修相談で受けた指導を履修にあたって参考にしましたか。

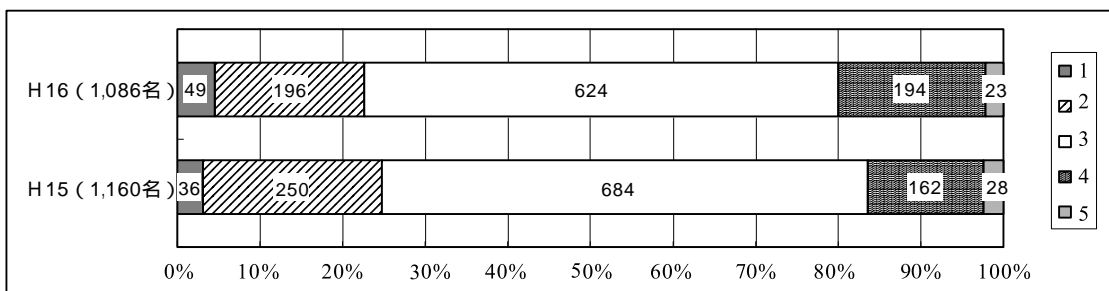
1. 大いに参考にした。 2. かなり参考にした。 3. ある程度参考にした。
4. あまり参考にしなかった。 5. ほとんど参考にしなかった。



大いに参考にした、かなり参考にした、ある程度参考にした人を合わせて、履修相談を受けた学生のみさんの90.4%（H15は91.1%）が指導を参考にしました。履修相談の重要性が良くわかります。また、履修相談は非常に効果的に機能していると評価できます。全体の傾向は昨年とほとんど同じでした。

問6)「履修マニュアル」の解説はわかりやすかったですか。

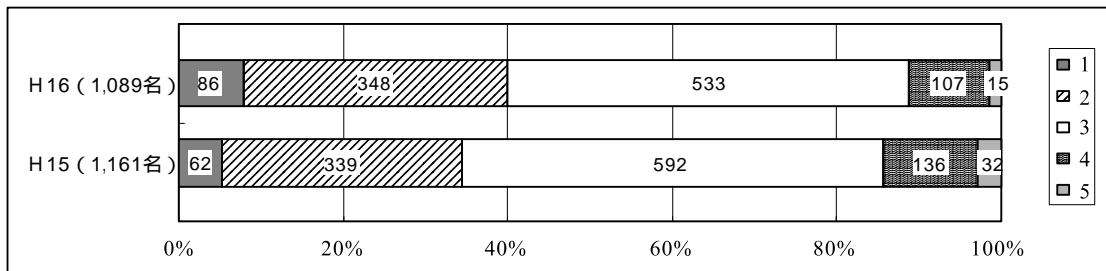
1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。 3. ある程度理解できた。
4. あまり理解できなかった。 5. ほとんど理解できなかった。



「充分」「かなり」「ある程度」を合わせて80.0%（H15は83.6%）が理解できたと回答しました。また、問3)の履修ガイダンスに比べて「充分」と「かなり」の比率が高くなっていることから、じっくり読んで理解できる履修マニュアルは効果的なようです。全体として昨年とほぼ同じですが、「ある程度」までの数値は3.6ポイント減少しました。

問7)「授業計画解説」(シラバス)を読んだときの印象と実際の内容が対応している授業が多かったですか。

1. 多かった。 2. かなりあった。 3. 半分程度あった
4. かなり少なかった。 5. ほとんどなかった。

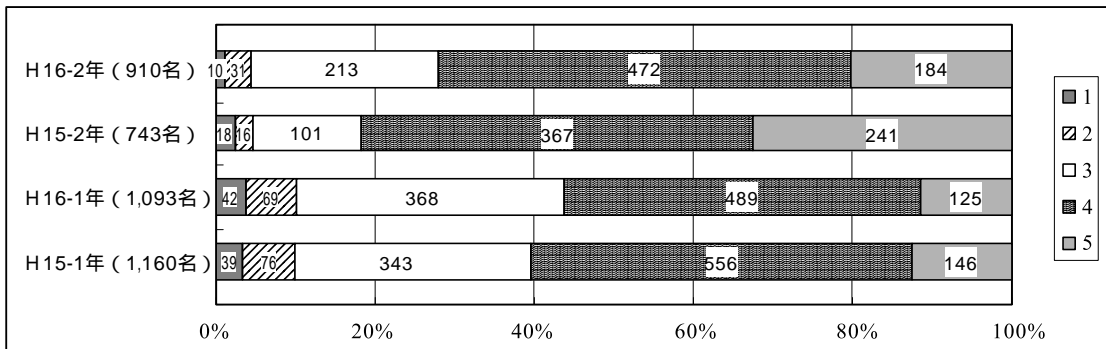


約半数(49.1%、H15は51.0%)の学生のみなさんが「シラバスの印象と実際の内容が対応しているものは半分くらいしかなかった」と評価しています。「多かった」と「かなりあった」と感じた人は39.5%で、平成14年度前期(32.4%)、平成15年度前期(34.5%)に比べ、少しずつ増加してはいますが、来年以降の一層の改善が必要です。

<基礎教育科目について>

問8)21世紀教育では、副題・内容が異なっている場合でも、授業科目名が同じであれば、同一授業の反復履修禁止と規定しています。同一授業の反復履修禁止をどう思いますか。

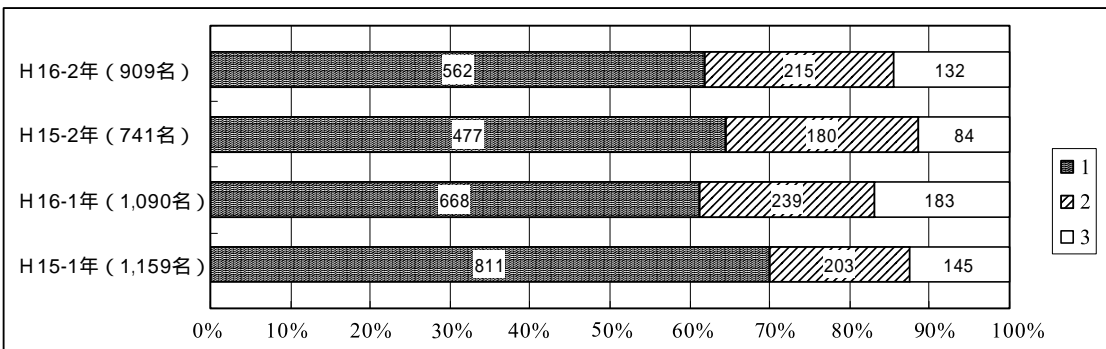
1. 非常に良い。 2. かなり良い。 3. ある程度良い。
4. あまり良くない。 5. 非常に良くない。



あまり良くない、非常に良くないとする人が1年生では56.1%(H15は60.5%)、2年生では72.1%(H15は81.8%)を占めました。非常に良い、かなり良いは1年生では9.9%(H15は10.0%)、2年生では4.5%(H15は4.4%)でした。今期の2年生は、1年生の時に比べて良くないとする比率が60.5%から72.1%へ12.1ポイント上昇しました。学生のみなさんは現状に大いに不満を持っており、学年があがるほど不満は増加しています。これは学生のみなさんに、できるだけ興味あるものを履修したいという希望があるためでしょう。幅広い知識・教養を身につけさせるといふ21世紀教育の考えと、学生のみなさんの意識に大きなずれがあります。これは問2)で見たように学生のみなさんが積極的に21世紀教育の重要性や意義を理解・評価していないことと関係がありそうです。この傾向はアンケートを開始して以来3年間変わっていません。至急改善しなければならない課題です。

問9)基礎教育科目では、履修制限を避けるために、授業によって履修者が大人数(例えば150名以上)に上る場合があります。これについてどう思いますか。

1. どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりはよい。 2. 多くとも150名くらいで履修制限すべきだ。
3. 100名くらいで履修制限すべき



どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりはよいは1年生では61.3%(H15は70.0%)、2年生では61.8%(H15は64.4%)を占め、依然として大多数が人数による履修制限に不満を持っているようです。「150名で履修制限」は1年生では22.0%(H15は17.5%)、2年生では23.7%(H15は24.4%)、「100名で履修制限」は1年生では16.8%(H15は12.5%)、2年生では14.5%(H15は11.3%)でした。受けた科目を受講できないということは学生のみなさんにとっては大変な不利益で、引き続き来年度以降も、必要と考えられる開講数の整備や、時間割の組立などの工夫を重ね、履修制限を受ける人が1名でも少なくなるように、努力を重ねて行く必要があります。

21世紀教育学生アンケート歴代自由記述の 主な意見への回答

21世紀教育センター運営委員会は平成14年度から独自に企画立案した「学生アンケート」を毎年2回実施してきております。その集約結果は本センターニュースや大学ホームページを通じて教職員と学生の皆様に紹介して、教育改善に努めてきました。

しかしながらアンケートの自由記述欄に記された学生の皆様の要望・意見に関してはあまりに膨大多岐に亘るために、そのままの形でコピーしたものを教職員に限って回覧せざるを得ませんでした。

今回、アンケート開始から3年を経て上記の要望・意見の中で主要なもの、切実なものの傾向が見えてきましたのでFD広報専門委員会がそれらを抽出し、教務専門委員会が主として回答をすることにしました。中には要望に応じて既に改善措置を講じたものも混じっておりますが、ここ3年間を集約した項目となっておりますので、誤解のないようお願いいたします。

学生の皆様には今後とも自由記述欄へのご協力をお願いします。

1. ガイダンス・履修相談について

(1) ガイダンスでの説明が分かりにくい。

ガイダンス担当教員に対して、事前にガイダンスを行うとともに、説明項目を精査し、理解しやすい説明を行うように努めます。

(2) 履修マニュアルが分かりにくい。

掲載項目及び文章を見直し、理解しやすいマニュアルの作成に努めます。

(3) 履修相談で、システムを理解していないで担当している教員が多い。

履修相談担当教員に対しては、事前にガイダンスの説明事項などを配付しておりますが、今後は履修相談担当者に対してガイダンスを行うなどの措置を行うことなどについて検討します。

2. 時間割について

(1) 受講したい講義が学部の専門科目と重なっている。

原則として、21世紀教育科目の開講時間帯には、専門教育科目は開講しないこととしていますが、やむを得ず一部開講している専門教育科目もあります。今後も学部と協議を行い、21世紀教育科目の開講時間帯に専門教育科目は開講しないよう検討を行います。

(2) 受講したいテーマ科目や基礎科目が重なっている。

テーマ科目及び基礎教育科目はできるだけ所定の開講時間帯の中で分散して開講するようしておりますが、限られた開講時間帯の中で開講することから、ある程度重複して開講することに御理解願います。

(3) 教員免許を取得するのが困難な時間割になっている。

多分、専門教育科目と重なることで困難となっているかと思われますので、学部に専門教育科目の開講時間帯を配慮するよう申し入れます。

(4) 受講したい講義が取れなくて、翌年に取りようとする と開講されていないことがある。

テーマ科目については、担当教員の授業担当ローテーション等により毎年度同じ授業科目は開講しておりませんので、履修を希望する授業科目を全て履修することは難しいと思いますが、できるだけ開講時間帯の中で分散して授業を開講するように努めます。

(5) 講義室が学部間にまたがっていることがあり、移動が大変である。

21世紀教育科目は、できるだけ総合教育棟の講義室を使用するようしておりますが、より多くの受講希望者を受け入れるため学部校舎の講義室も使用しております。履修制限を避けるため、ある程度のやむを得ない措置であることを御理解願います。

3. シラバスについて

(1) 実際の授業内容とシラバスが異なる。

授業担当教員に対しては、シラバスに沿って授業を実施するようお願いしておりますが、今後さらにシラバスどおり授業実施するよう徹底します。

(2) 実際の成績評価とシラバスが異なる。

21世紀教育科目は、授業科目区分ごとに成績評価の方法と基準を定め、この方法と基準に沿ってシラバスの成績評価の方法を記入したうえで成績評価を実施するよう授業担当教員に依頼しております。

しかしながら、授業科目によっては実際の成績評価がシラバスと異なることがあり、その際は21世紀教育センターから改善を求めています。

(3) シラバスを分かりやすく記載して欲しい。

21世紀教育科目のシラバスについては、授業担当教員から提出されたシラバス原稿を精査し、難解なものや意味が通じないものについては再考を依頼しております。

今後も分かりやすいシラバス作成を心掛けたいと思いますので、具体的にどの授業科目のシラバスが分かりにくいかが指摘していただければと思います。

4. 履修方法・履修制限について

(1) 抽選による履修制限は止めてもらいたい。

テーマ科目及び基礎教育科目では、受講希望者が多数の場合、講義室を変更し、なおかつ受講希望者が講義室収容定員を超過した場合、抽選を行っております。

これは物理的に受講者が着席できない状況避けるためのやむを得ない措置と御理解願います。

また、スポーツ実技及び芸術実技は、収容定員を定め、抽選を行うことがあります。これは用具や設備の関係でやむを得ない措置と御理解願います。

(2) 反復履修を許可してもらいたい。

21世紀教育科目は、幅広く履修してもらうため、通常の授業科目は反復履修を許可しておりません。これは、教養教育科目としての性格と御理解願います。

ただし、テーマ科目は、現在も授業内容が異なれば、1授業科目を4単位(2回)まで修得することができます。

(3) 学部・学科で授業科目選択に制限をかけないで欲しい。

一部の学科では履修できない授業科目を設定していますが、これは専門教育科目との連携を図るための制限ですので、御理解願います。

(4) クラスの人数が多すぎると騒がしくなるので受講者制限に賛成する。

学生アンケート等によると、約7割の学生が受講者制限を行わないよう回答しており、現在21世紀教育科目は、できるだけ受講者制限を行わないようにしております。

(5) 履修の仕方が複雑すぎるので簡明なものにしてもらいたい。

専門教育科目と比較して21世紀教育科目の履修方法が複雑な部分もあるとは思いますが、より良い教育効果を得るために履修方法を定めています。

今後も分かりやすいガイダンスの実施や履修マニュアルの作成を心掛けますので、御理解願います。

5. 単位数の設定について

(1) 単位の上限の撤廃の要求。

各学期に履修できる単位数の上限については、履修する授業科目を安易に取りやめることなく、集中して履修してもらうための制度です。これまでも学生のみなさんの意見などを取り入れ、単位数の上限を修正してきましたので、今後も様々な意見を取り入れ適正な上限を設定していきます。

(2) 必要な単位が多すぎる。(医学部に多い)

卒業所要単位数については、専門教育科目の連携及び基礎学力の養成などを考慮し、今後見直しを行います。

6. 評価方法・単位認定の方式について

(1) 教官毎の評価のばらつきが大きい。

21世紀教育科目は、同一授業科目を多数開講するため、成績評価の方法と基準を定め、評価を行うよう授業担当教員に要請しています。

今後できるだけ統一した方法と基準により成績評価を行うよう、授業担当教員に要請を行います。

(2) 評価の基準が不明確。

21世紀教育科目では、成績評価の方法と基準をできるだけ詳細にシラバスに掲載するよう、授業担当教員に要請しております。しかしながら、シラバスに掲載された成績評価方法と実際の成績評価の方法が異なるなどの意見があることから、今後、シラバスの成績評価と実際の成績評価を比較検証し、改善の方策を検討します。

(3) 相対評価をやめて欲しい。

相対評価については様々な意見がありますが、これからは各方面から意見を聴取し、より良い評価について検討を続けます。

(4) 不合格の理由を開示すべき。

不合格の理由を開示すべきとの御意見ですが、個人が特定できるような開示はできないことから、現時点では不合格の理由を知りたい場合、授業担当教員に直接問い合わせるよう願います。

7. 全体に関する記述について

(1) 21世紀教育の意義・重要性が良く分からない。

履修マニュアルにも掲載していますが、21世紀教育科目は、専門教育科目を学ぶうえでの基礎・基本の修得とともに、専門教育科目では学ぶことができない幅広い教養の修得を目指しています。

(2) 授業が専門的すぎる。

(3) 授業の内容がつまらない。興味を刺激する授業がない。

授業担当教員には、授業内容について、毎年度点検・見直しをお願いしております。

具体的にどの授業科目のどの部分が専門的すぎたか、どの授業科目がつまらなかったか、お知らせいただければ、検討を行います。

(4) 授業の難度に差がある。

異なる授業科目間における授業の難度については、一概には比較することは難しいかと思いますが、俗に単位が修得しやすい授業科目、しにくい授業科目への対応は今後の検討課題とさせていただきます。

8. アンケートに関する記述について

(1) アンケートの記名方式について

記名方式の学生アンケートに対して、本当のことが

書きにくい、プライバシーが守られているか心配だ、という意見が寄せられています。

記名方式を採用している理由は、責任ある記述をして欲しいことと、回収率を高めたいためです。また、アンケート結果の公表に際しては、個人のプライバシーに十分配慮して行っています。一方で、このようなアンケートは本来匿名で行われるべきだと考えます。現在の回収率は約80%です。回収率をさらに高め、記述の信頼性を損なわないような方式について、無記名制とあわせて検討します。

9. 教室や設備について

(1) 講義室の設備及び環境の改善について

講義室の設備については、年次計画により、徐々に整備しております。特にマイク設備については、予算の関係もありますが、できるだけ早急に対応したいと思えます。

(2) 授業を実施する講義室について

履修者が多くて着席できないなどの意見がありましたが、できるだけ履修制限を行わないこととしていることから、ある程度履修者が多いことに関しては御理解願います。なお、講義室収容定員を超えた授業科目については、講義室変更または履修制限を行っております。

(3) 掲示板が見づらい、乱雑だ。

掲示物は、できるだけ整理して掲示板に掲示するようにします。

10. 事務関連について

(1) 事務の対応がよくない。

今後事務職員に対しては、研修などを通してより良い対応を行うこととします。

(2) 履修手続きが複雑だ、通知表の様式を変えた方がよい。

履修登録、手続き、通知表の様式などについて意見がありましたが、今後とも意見を集約し、より良い手続き方法及び様式にするようにします。

11. オムニバス授業について

(1) 授業内容に関する担当者同士の連携の必要性（内容の重複や一貫性の無さ）

(2) 担当者がすぐに変わり、表面的な話しか聞けず、中途半端であること。

オムニバス授業に関しては様々な意見があり、現在21世紀教育関係委員会でオムニバス授業のあり方について検討をしています。

12. 教員の教授方法について

(1) 声が聞こえないのでマイクを使って欲しい。

(2) マイクを使っても声が聞こえない。

(3) 字が小さい、読めない。

(4) 熱意ある教員とやる気のない教員との差が大きい。

(5) 学生の基礎知識を確認せずに専門的な話をする。

このような意見が出ていることを教員に周知させるとともに、教員への研修の機会を利用して、21世紀教育の意義の理解や教授方法の改善を図るように努めます。問題を後回しにしないためにも、授業時に解決できる点についてはできるだけその場で教員へ要望して改善してもらうようにしてください。

13. 出欠について

(1) 出席点を重視すべき / 出席を厳格に確認すべき。

(2) 出席点は重視すべきでない / 出席は確認しなくてもよい。

(3) 出席の確認の仕方が教官によってバラバラである。

21世紀教育科目では、出欠は必ず取るよう授業担当教員に要請しています。これは単に期末試験だけで成績評価を行うのではなく、平常評価及び中間評価を取り込み、成績評価を複数化することにより、21世紀教育科目は、より正確な成績評価を実施することとしているためです。したがって、今後も21世紀教育科目は出欠を必ずとる方針は変わりませんが、単に出席しただけで成績評価する出席点はいらないこととします。

14. 試験・レポートについて

(1) レポートに対する評価やコメントをつけて欲しい。

現在21世紀教育科目では、期末試験及び期末レポートは、できるだけ返却するよう授業担当教員に要請しています。しかしながら、期末試験等の返却は次学期以降でないといけないため、全ての授業科目で返却は難しいのが現状です。

(2) カンニング対策を適正に行なって欲しい。

授業担当教員に対しては、期末試験等を実施の際は適切な試験体制で実施するよう要請しています。今後もカンニングに対しては、適切な方法で防止を図るよう検討します。

(3) 難しい試験や易しい試験等、教員毎のばらつきが大きい。

できるだけ試験等による成績評価については、平準化を図れるような方策を検討します。

講義紹介



比良木 高幸

テーマ科目「人間」の「創造する人間」分野は、私の専門と企業経験を活かせるのではと考え担当した。

前半の、映像と音楽を駆使して大好評の岩井康頼教授による「絵画」の講義のあと、後半は「デザイン」分野で考える創造の世界を、全編、パワーポイントによる映像資料で教授した。

ここでは「デザイン」講義の目的と授業の方法、その結果について、使用した仮説発想のツールと学生の解答、感想などをレポートし、意義について述べたい。

1. 本講座の目標

21世紀の日本にとって創造力の強化は重要な課題である。

学生が今後どのような専門に進むにしても、創造力は仕事の全ての場面のみでなく、日常生活や一生の間に直面する様々な問題を解く基礎的な力であり能力である。

今後の学習で、あるいは仕事で専門家として実務を行う時、創造力の優劣が成果を左右する。授業では幅広いジャンルにまたがる情報感度、自らの課題に対応できる情報活用、時代感覚を持ち時代動向を捉え推論し創造に結びつける力、問題発見と解決能力、総合化能力の強化を意図した。

私は家電商品分野の企業で30数年、事業、商品開発、開発マネジメント、専門性人事、デザイン会社の経営を経験した。産業市場が求める人材には発想力、創造力、具体化推進力が基礎的な資質として重要であることを実感してきた。

この講座では、デザインの専門分野を軸にして、多様な視点から人間の創造性について学ぶ。今後の各自の専門の学習と研究における、豊かで柔軟な発想力と洞察力、創造力に資することを目指した。

併せて、創造性を発揮することの楽しさと充実感を実感して、一人一人が他と異なる特有の発想や考えや性格を持つことでのアイデンティティの強化と、個性を育み、存在感をもって、集団の中で専門や社会に貢献することを期待する。

2. 授業の方法

次のように授業を構成した。太字は講義

- (1) **デザインの創造活動と時代性発想**
時代性の抽出
- (2) **デザインの創造活動と時代性発想**
時代性のキーワード
・課題「時代性抽出シート」出題
アイデンティティとオリジナリティ事例研究
- (3) **ドラマ発想とプロデュース**
・「シート回答」回収
- (4) **インタフェース発想法**
・「シート回答例」の発表と講評
・レポート出題「価値観発想について」
A4レポート用紙1枚
- (5)・レポート回収(次週教員に依頼)
以上の内容を平成16年度は4月13日から6月8日の7コマで実施した。

達成目標は人間の創造活動をデザインの領域で広く深く実例をもとに考察することによって時代の価値観と生活文化意識を持ち、組織や個人の個性化の意義を知る。

評価は中間で出題し2週間で回答する「時代性抽出シート」(10ページ参照)の提出と最後に出題したレポートでの理解度評価による。出席は授業の効果のため配点の対象とした。

3. ツール「時代性抽出シート」演習

情報収集と整理分析、類推能力と仮説発想力を高めるための「時代性抽出シート」による演習の方法と効果について述べる。これは日本デザイン学会の研究論文に「フィールドサーベイの方法」として発表した「思考の反応炉」を改良して、企業で開発や研修に使用しているシートである。

シートの最外周A欄は3つの大分類「文化」「文明」「社会・環境」。B欄にジャンル名を。C欄に各ジャンルで起きている主な出来事、売れている商品、人が集まっているコト、場所、催し、注目度高い主題を。D欄にはその原因、要因、心理などを記入する。図の中心のE欄には各ジャンルで起きているモノゴトの要因が他のジャンルでの要因と同じか同期している場合、キーワード化して記入。この中から総合的に強い傾向と考えられる傾向を最上部のF欄に時代の傾向や特長を言い表す仮説としてのキーワード、キーワードを想起して記入するものである。時代の動向や特色を多くの異ジャンルの洞察から類推して仮説として発想、創造する練習問題である。

細分類した分野別に情報収集し、分析し、総合的に分野を俯瞰し類推して発想させる。

4. 学生の「時代性の仮説」回答例

F欄の仮説キーワード回答例を記してみますが、実に巧みな発想で共感できる。

- ・品揃えの悪いコンビニ時代(こう有りたとは思っても、目の前にはマイナス要素が並び選択の余地がない)
- ・アクアリウム型個性(作られた不安や安楽によって個性が演出されている)
- ・なんちゃってセレブ(高級安全を求めるが、所詮お手軽お気軽志向の時代だ)
- ・一寸先は「病み」(不安と不幸の予感)
- ・幸せなら手を叩こう、幸せなら手を叩こう時代(調子合わせてみるが虚しい)
- ・みのむしの時代(自分の周りだけはモノを集め暖かくして時代の好転を待つ)
なんと鋭くも豊かな比喻かと感心する。

5. 学生の感想と評価

学生のレポートでの反応を拾ってみた。

「(他の学生の時代性抽出の)題名を見て驚いた。同じ社会、同じ時を過ごしているはずなのに、個々人にとっての現代社会とはとても違うものだった。(中略)これから先、自分は医師になる道を歩むはずだが視点の変化が将来を変えてくれるかもしれない。抽出シートの経験をいかして今以上にもっと広い視野で物事をとらえていきたい。医学 T.T」

「(中略)あいまいで、単なる漠然とした、何のつながりも持たない独立した現象のようなものに過ぎなかったのだが、この講義を受講し、時代性シートに取り組むことによって、時代の動きを読むことがいかに大切であるかということや、今やっているもののジャンルを超えた相互の関係性、そしてそこから読み取れる時代の動向、ある種の法則性などを知ることができて、非常に興味深かった。人文 M.K」

「創造するということがなんであるのかを学び、自分の創造力を強化し、自ら創造することで自分なりの個性を発揮したいと考えたのが履修したきっかけだった。(中略)時代性の抽出をレポートで実践したことはいい経験になった。普段とは違った視点、例えば普段はあまり気にかけることのない産業や経済という視点からも時代を観察することができた。(中略)授業を通して、デザインを軸として人間の創造活動について学んだこと

で、私自身のものの見方、捉え方が大きく変わったのではないかと思う。今までより広い多様な視点で、洞察し発想することが出来るようになったと思っている。医学 F.S」

「(中略)寒い冬を乗り切るミノムシのように、様々な安心や機能を身にまとい、景気回復を待っているふうに見えたわけです。(中略)楽しいことを寄せ集めて、あっちにふらふらこっちにふらふらしながら気楽に時を経ている感じです。教育 F.O」

「無造作に散らばっているような数々のブームであるが、それぞれの背景を挙げていくと、重なるところが多いことに驚いた。(中略)さらにそれらをまとめると、なんとなく今という時代の輪郭が見えた気がした。理工 T.W」

「私は自己の専門ばかりに目を向けていては本当の意味でその専門知識を生かすことはできないと考えるようになった。時代性抽出シートの作成をする中で物事は複合的な要因によって成り立っているということを改めて認識させられたからである。(中略)確かに時代は専門性を求めているし、専門知識は深く切って物事を見ることが出来る武器となりうる。しかしながら時代が求めている専門というのは「もっぱら」という専門ではなく、その分野に「重点を置く」という感覚の専門性、つまり授業でも出てきたキーワードである「総合化」することができる専門性を求めているのではないだろうか。だから私は専門分野を軸にあちらこちらにアンテナを張り巡らせることのできる人になりたいと考える。教育 Y.S」

6. 21世紀教育の意義について

創造する人間(デザイン)の授業を通じて、映像化したリアルな臨場感に注力した講義とインタラクティブな構成が、学生の興味と理解度向上や詳細な反応を知ることの効果的なこと、それは自身の講義内容の修正、洗練に必要なだけでなく、教授する力と充実感を学生から与えられることを実感した。

専門の学習研究の前段での総合的な思考態度の醸成が、これからの柔軟で個性的、創造的な発想による各分野の専門家育成に必要と再確認した。

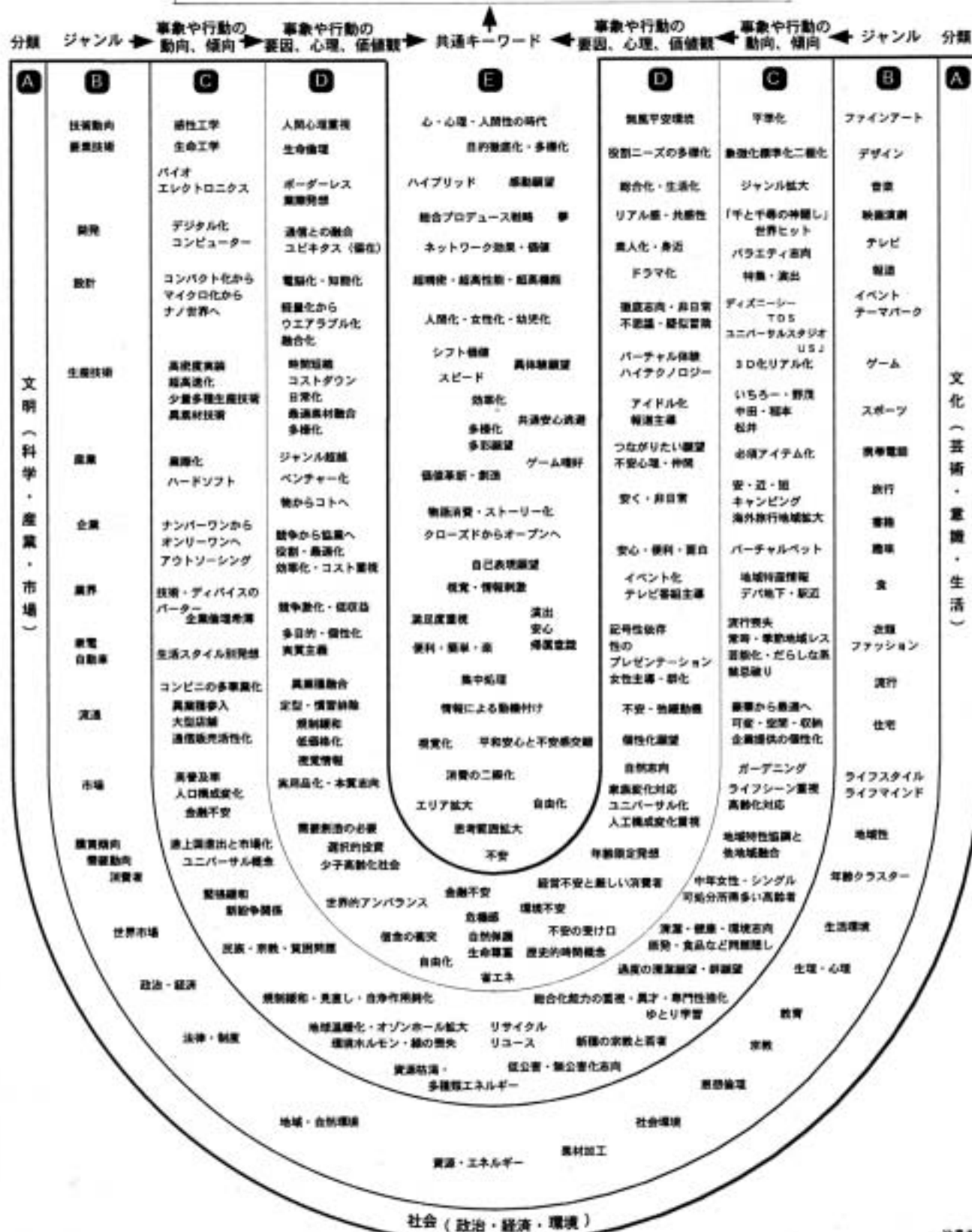
複数年の本大学の講座での学生の回答と、兼業で実施中の東京の企業研修での企画、マーケティング、開発技術者による回答との、比較分析は今後の研究課題である。

時代のキーワード、キーワードズ (仮置)

F 「シネコン (シネマコンプレックス、集合型小映画館群)」型 自己演出満足の時代

解説、詳細説明

多岐に消費された「生活シーン演出メニュー」の選択時代、各人は自己主導している気分。
しかし、劇的に仕掛けられた「安心の定型」に浸る生活感、メニューの「融合」と、自身喪失の「喪失感」。





北海道大学教育ワークショップから 学んだこと

21世紀教育センター高等教育研究開発室 土持 法一

平成16年11月5日～6日(土)(1泊2日)、北海道奈井江町農業構造改善センター(ないえ温泉ホテル北乃湯)で行われた、第7回北海道大学教育ワークショップについてレポートします。

FDワークショップに参加された、北海道大学副学長・井上芳郎氏の話によれば、日本におけるFD活動の起源は、医学教育の反省からであったことを知りました。それも、アメリカの医学教育から学んだことが端緒で、1974年「医学教育者のためのワークショップ」(富士研ワークショップ)が、富士教育研修所(静岡県裾野市)において、5泊6日の日程で行われ、多くの研修者が育ったそうです。北海道大学におけるFDの嚆矢となったのも、1992年に開催された、医学部教育ワークショップによるもので、1995年から導入された医学部6年一貫教育の準備のために、「富士研ワークショップ」に参加した阿部和厚・名誉教授(医学部解剖学教授)が主導したものだそうです。その後、阿部氏が、高等教育開発研究部長として、北海道大学全体のFDを主導し、1998年から実施されているのが、このワークショップで、今年で7回目ということになります。我々の

グループのなかにも、医学部の先生が加わり、議論を豊かにしてくれました。

FD研修といえば、専門家を招き、講演の後に、パネルディスカッションをするのが一般的ですが、北海道大学の場合、ワークショップの名の通り、バスに乗り込んだ途端から、研修が始まるというハードなスケジュールで、徹底して、作業から学ぶというものでした。

ワークショップの趣旨は、「現在、大学の教育現場において、学生に知的な刺激を与え、自主性を引き出し、自学自習の態度・習慣を身につけさせることが強く求められている。」という視点に立ったものでした。研修内容について、以下に簡単に説明します。「スケジュール案」も参照してください。

1)指定された「全学教育科目」について、全3回のグループ作業を通して、「シラバス」を完成させるもので、7～8名で、5つのグループにわかれて作業を行いました。

2)グループは、(1)一般教育演習/コミュニケーション能力を高める科目、(2)一般教育演習/異文化理解を深める科目、(3)科学・技術の世界/



市民の倫理に関する科目、(4)科学・技術の世界/文系学生のための科学・技術に関する科目、そして、(5)複合科目/文理融合を目指す科目に分けられました。

3)各グループでは、役割分担(リーダー、記録係、OHP作成係、発表者)をローテーションで決めました。

4)グループ作業「授業の設計1:科目名・目標の設定」、グループ作業「授業の設計2(目標の手直しと)方略」、そして、グループ作業「授業の設計3(方略の手直しと)評価」を行いました。グループ作業の前に、主催者側によるミニレクチャーが行われました。グループ作業では、主催者側のタスクフォースが重要な役割を担いました。

5)各グループ作業の結果を、OHPを使って発表し、活発な質疑応答が行われ、最後に、高等教育開発研究部・小笠原部長が豊富なジョークを交えて、的確なコメントをしました。

FDワークショップ作業を通して、授業改善のために、「シラバス」がいかに重要であることを学び、準備のために、膨大な時間と労が必要であることを学びました。本学におけるFDワークショップを実施するにあたって、数々の貴重な体験をすることができました。

帰路のバスの中で、主催者側が、研修成果を評する中で、アメリカの大学におけるシラバスは、「もっと凄い」との言葉が印象的でした。シラバスは、授業にとっての「ライフライン」のようなもので、どのような目標で授業をするのか、目標を達成するために、どのような授業内容にするのか、どのような到達度を学生に期待するのか、授業に臨むにあたって、学生へのアサインメントは的確か、そして、どのような方法と基準で、成績評価をするのかなどが、「契約書」のように詳細に書かれているのがシラバスである。授業改善のための「シラバス」のあり方について考えさせられました。現在、各大学で一般的に用いられているシラバスは、アメリカの大学における講義概要に相当するもので、授業計画のシラバス(Course Syllabus)とはほど遠いものです。

参加者は、FDワークショップでの、研修成果をどのように自分の授業改善に繋げるか、新たな「悩み」をかかえて帰路につきました。

平成16年度北大FDスケジュール

11月5日(金)

8:30	北大学術交流会館前集合
8:45	バス 出発 研修開始:オリエンテーション
9:55	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着、 玄関前で記念写真
10:00	挨拶「FD実施にあたって」(井上副学長)
10:15	ミニレクチャー 「大学教育とeラーニング」(30分+質問5分)
10:50	ミニレクチャー 「eラーニングシステムHuWebとは」 (30分+質問5分)
11:25	休憩(10分)
11:35	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング(25分)
12:00	昼食(60分)
13:00	ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」・「学習目標」(30分)
13:30	グループ作業 の課題の説明・グループ 学習室への移動(10分)
13:40	グループ作業 「授業の設計1:科目名 ・目標の設定」(60分)
14:40	発表・全体討論(50分)
15:30	休憩(20分)
15:50	ミニレクチャー「教育方略」・「学生参加 型授業の例」(30分)
16:20	グループ作業 の課題の説明・グループ 学習室への移動(10分)
16:30	グループ作業 「授業の設計2:(目標 の手直しと)方略」(60分)
17:30	発表・全体討論(50分)
18:20	夕食・散歩・風呂など(100分)
20:00	話題提供「新しい北海道大学の授業」(50分)
21:00	懇親会

11月6日(土)

7:30	朝食
8:30	ミニレクチャー「評価」(30分)
9:00	グループ作業 の課題の説明・グループ 学習室への移動(10分)
9:10	グループ作業 「授業の設計3:(方略 の手直しと)評価」(60分)
10:10	発表・全体討論(50分) - 休憩(10分) -
11:10	参加者の個人的感想や意見(50分)
12:00	昼食(60分)
13:00	バス出発
14:30	北大学術交流会館前到着



21世紀教育センター・学務部教務課

弘前大学21世紀教育センター

〒036-8560 弘前市文京町1番地(総合教育棟内)

事務担当 学務部教務課課長補佐

TEL : 0172-39-3104

E-mail : jm3104@cc.hirosaki-u.ac.jp

21世紀教育担当

TEL : 0172-39-3106

E-mail : jm3106@cc.hirosaki-u.ac.jp